

甦る 中山岩太

モダニズムの光と影

IWATA NAKAYAMA: Reconstructing a Master Heritage

2008年12月13日(土)～2009年2月8日(日)
東京都写真美術館3階展示室

主 催 東京都／東京都写真美術館／
読売新聞東京本社／美術館連絡協議会
協 賛 ライオン／清水建設／大日本印刷
特別協力 中山岩太の会／兵庫県立美術館／
芦屋市立美術博物館／ラボテイク
協 力 フォト・ギャラリー・インターナショナル



「上海からきた女」1936年頃

開催概要

中山岩太(1895～1949)は、日本の近代的写真表現を切り開いた重要な写真家です。1918年に東京美術学校(現・東京藝術大学)臨時写真科を第1回生として卒業し、農商務省の海外実業練習生として渡米します。21年にニューヨークに写真スタジオを開業した後パリに渡り「フェミナ」誌で嘱託写真家として活躍する一方、藤田嗣治やマン・レイなど先進的なアーティストたちと交流を深めます。27年に帰国。30年に「芦屋カメラクラブ」をハナヤ勘兵衛らと結成し、また32年には野島康三、木村伊兵衛らとともに写真雑誌『光画』を創刊し、モダニズムの感性にあふれた「新興写真」の旗手として日本の近代的写真表現をリードする存在となります。

本展では、作家の手によるオリジナル・プリントに加えて中山岩太の会、芦屋市美術博物館が中心になって調査研究してきた「残されたガラス乾板」をもとにして、銀塩印画紙によるプリントを展示。ニューヨーク時代から晩年に至るまでの主要な作品を中心に、全紙大のプリント約40点を制作するとともに、制作過程を明らかにするガラス乾板などの展示も行います。『光画』などの当時の写真雑誌、関係資料をあわせて約135点の作品と資料を展示いたします。

新たに制作されたプリントは、中山岩太の華麗な写真表現をダイナミックに再現するだけでなく、銀塩写真の危機が叫ばれている今日にあって、歴史的遺産ともいえるべき写真原板をいかに後世に伝えていくかという問いかけに対する一つの答えを示す展覧会でもあります。

出品作品数(予定)

展示作品および資料 約135点

- ニュープリント(全紙大) 約40点
「福助足袋」(1930)、「上海からきた女」(1936)、「イーブ」(1940)、「デモンの祭典」(1949)ほか
- ガラス乾板 約10点
「福助足袋」、「上海からきた女」、「イーブ」、「デモンの祭典」ほか
- ヴィンテージ・プリント 約70点
- 関係資料 約15点
写真雑誌『光画』ほか

本展のみどころ

①美しいヴィンテージ・プリントの数々

中山岩太作品の魅力のひとつは、自身による美しいプリントにあります。今回は当館や兵庫県立美術館のヴィンテージ・プリント作品約 70 点を展示し、その究極の美しさをご堪能いただけます。

②「残されたガラス乾板」よりモダンプリントを制作

この展覧会のために、歴史的遺産ともいえる「残されたガラス乾板」をもとにして、銀塩印画紙によるモダンプリントを制作しました。ニューヨーク時代から晩年に至るまでの主要な作品を中心に、全紙大のプリント約 40 点で、今甦った岩太作品の美しさをお楽しみください。

③ガラス乾板などの展示でプリントの制作過程が明らかになる！

モダンプリントの制作過程を明らかにするために、岩太自身が撮影したガラス乾板、コンタクトプリント、引伸ばしをする際の覆い焼きの工夫などがわかる資料を展示します。今回のモダンプリントは、研究者・著作権者・プリンターの三者がそれぞれの立場で作品をオーソライズし、ヴィンテージ作品の美しさをいかに忠実に再現するかをゴールに極めて慎重に制作されました。美術館がこのような歴史的遺産をどのように今の展示に活用していくべきか、その指針となる試みといえます。

④豊富な資料展示

『光画』をはじめ今回の展示作品が掲載された当時の写真雑誌を数多く展示します。作品が発表された時の様子が実感できる資料展示で、作品をより深く理解できます。

⑤東京都写真美術館は、美術館として中山岩太作品を初めて正式収蔵を予定しています

いままで当館には中山岩太のヴィンテージ・プリントが 18 点寄託（中山岩太の会より）されており、また芦屋市立美術博物館、兵庫県立美術館などにもヴィンテージ・プリントを中心に寄託されていました。今回の展覧会を機に、国内外の美術館としては初めて、東京都写真美術館にモダンプリント作品が正式収蔵される予定です。大変意義のあるコレクションが実現します。

図録のご案内

展覧会の開催に合わせ、主な出品作品を掲載した展覧会図録を発行いたします。
当館ミュージアムショップ ナディップバイテン（電話：03-3280-7279）にて販売します。
詳細は決定次第、当館ホームページなどで発表します。
東京都写真美術館ホームページ <http://www.syabi.com>

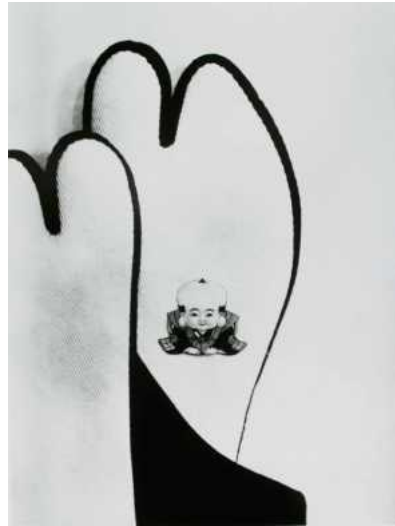
出品作品のご紹介

ここでは出品作品の中から数点をご紹介します。岩太作品の豊かな表現の世界をお楽しみください。



（左）「デモンの祭典」 1948 年

「絶作」であるこの作品には、戦後という新しい価値観の中で生きてゆこうとする中山岩太の苦悩が結晶しているよう。ヌードや貝殻などをモンタージュした表現は、死を目前にした中山が幻視した世界ではないだろうか。



(左)「長い髪の女」 1933年
外国人女性の頭部をクローズ・アップしたこの作品は、上下が逆さまに撮影されている。大胆な発想をもつ表現には、近代的写真表現が獲得した自由なイメージーションが見てとれるであろう。

(右)「福助足袋」 1930年
第1回国際広告写真展で1等をとったこの作品は、伝統的な足袋をモダンな切り口で再構成する。これは広告写真の表現に新しい地平を切り開いただけでなく、日常的な物を新たに発見していった「新興写真」を典型でもある。

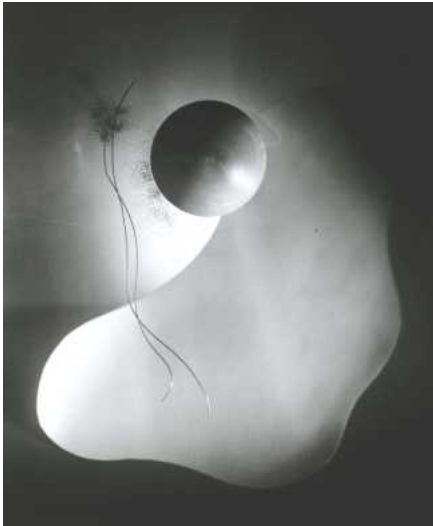
(右)「上海からきた女」 1936年頃
憂愁に満ちた女性の表情をとらえたこの作品は、中山岩太のポートレート表現の極北に位置する代表作である以上に、1930年代に爛熟するモダニズムの感性を視覚化するものである。



(左上)「蝶 (一)」 1941年
1941年第16回国画会展に出品されたこの作品は、「ソラリゼーション」と称される暗室での特殊技法を駆使して制作された。ポジ像とネガ像が交錯する表現は、現実と幻想が交錯する超現実的世界へと私たちを誘っていく。



(左下)「静物 (ひまわり)」 1948年頃
終戦直後の混乱の時代にストレートにひまわりの花を撮影したこの作品には、静謐な光が満ちている。それは、何もかも焼き尽くした戦争の惨禍をくぐり抜けた日本人の精神の喪失感に通底してゆく。



(左)「イーブ」 1940年

様々なオブジェを、ガラス板を使って立体的に構成する写真表現は、中山の独壇場である。抽象的なモチーフを扱っても、中山岩太の写真世界は常に幻想に充ち満ちており、超現実的な物語を見る者に感じさせる。

(右)「・・・・」 1933年

日本における近代的写真表現を確立に導いた写真雑誌『光画』1933年5月号の表紙を飾った作品である。創刊時から同人として参加した中山は、同誌に盛んに作品を発表して、日本の写真界をリードしていった。



<プレス用図版について>

このリリースに掲載されている8点の図版を、プレス掲載用にデータにてご用意しております。
ご希望の方は、次項の広報担当までお問い合わせください。

関連イベント

■新春ギャラリートーク

2009年1月2日(金)、3日(土) 16:00～

※本展覧会半券(当日押印)をお持ちの上、会場入り口にお集まりください。

■担当学芸員によるフロアレクチャー

第2・4金曜日 16:00～

※本展覧会半券(当日押印)をお持ちの上、会場入り口にお集まりください。

■講演会

2009年1月25日 18:30～20:30

「中山岩太のニュープリントを制作して」

比田井一良(ラボテイク)×金子隆一(当館専門調査員)

会場＝1階創作室

※当日10:00より本展覧会半券をお持ちの方に1階受付にて整理券を配布します。

開催概要

- 展覧会名 甦る中山岩太 モダニズムの光と影
IWATA NAKAYAMA: Reconstructing a Master Heritage
- 会期 2008 年 12 月 13 日(土)～2009 年 2 月 8 日 (日)
- 会場 東京都写真美術館 3 階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ www.syabi.com 電話 03 - 3280 - 0099
J R 恵比寿駅東口より徒歩 7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩 10 分
- 開館時間 10 : 00～18 : 00 (木・金は 20:00 まで) 入館は閉館 30 分前まで
ただし、1 月 2 日 (金) ～4 日 (日) は 10:30～18:00
- 休館日 月曜日 (ただし月曜が祝日または振替休日の場合、その翌日)、
年末年始 (12 月 29 日～1 月 1 日)
- 観覧料 一般 700(560)円 学生 600(480)円 中高生・65 歳以上 500(400)円
※()は 20 名以上の団体料金
※東京都写真美術館友の会会員は無料
※小学生以下、障害をお持ちの方とその介護者は無料
※第 3 水曜日に観覧する 65 歳以上は無料
- お問い合わせ先 東京都写真美術館事業企画課
＜展覧会担当＞電話 03-3280-0035
金子 隆一 r.kaneko@syabi.com、中村 浩美 h.nakamura@syabi.com
＜広報担当＞電話 03-3280-0034
久代 明子 a.kushiro@syabi.com、米田 智子 t.yoneda@syabi.com